２０１８年（平成３０年）７月２３日　月曜日

デーリー東北　１３面　掲載

光星 大一番も本領

「決勝にふさわしいゲーム」

仲井監督 一問一答

全国高校野球選手権青森大会決勝で９年ぶりに甲子園の切符を手にした八学光星・仲井宗基監督（48）は試合後のインタビューに「決勝にふさわしいゲームができた」と選手の全力プレーをたたえた。一問一答は次の通り。

―決勝を振り返って。

必ず勝ったゲームになると、選手たちも想定していたが、序盤で思いの外、良いプレーができた。緊張はこの大会を通じて非常に粘り強く、諦めないスタイルでプレーしていたので、最後まで何がなるか分からないと選手たちにも言っていた。勝因はほっきりとは引き出せないが、タフなゲームになるという想定の中で、選手たちがふだんに増して積極的にプレーしていたことが大きい。

―勝因は。

選手には「絶対に弱気になるな。強気に攻め」と伝えるな。青森県代表として恥ずかしくない試合をしたい。一昨年の甲子園では、非常に悔しい思いをした。戻っている人たちも引き続き、チームに関係のない人にも応援してもらえるような野球ができればと思ってる。そのためにも、選手には全力、ひたむきなプレーをしてもらいたい。

―目標は。

いつまでも「優勝旗が白河の関を越えられない」と言われるわけにはいかない。もちろん毎回優勝を狙っているが、平成最後の大会、そして記念すべき甲子園１００回大会で優勝旗を青森に持って帰るため、チーム一丸となって頑張っていきたい。

優勝後のインタビューで選手のプレーをたたえる仲井宗基監督

6回八学光星無死、左越え本塁打を放ちガッツポーズを見せる下山昂大

地元に凱旋 最高の一発

○…六回に左越え本塁打を放ち、追加点を挙げた八学光星の下山昂大（弘前四中出）。〝地元〟での一発に「とにかく塁に出てやる」と強い気持ちで打席に立ったと明かした。

内角の直球を振り抜いた瞬間、手応えがあった。高校の公式戦初の本塁打。「うれしくて、頭が真っ白になった」。ベンチで待つナインに、笑顔で迎え入れられた。「強豪校で自分を試したい」と、光星の門をたたいた。100人以上の選手が在籍するチーム。背番号を獲得するため、寝る間を惜しんでバットを振った。最高の形で〝凱旋（がいせん）〟を果たした下山は「成長した姿を見せることができた」と喜んだ。

光星ナイン 喜びの声

左から背番号、名前、学年

⑪ 後藤 丈海（2年）
登板した場面では、自分の持ち味の強気な投球ができた。甲子園ではピンチもしっかり抑え、投球でチームの勢いをつくりたい。

① 福山 優希（3年）
昨夏の悔しさは晴らせた。自分を助けてくれた打撃陣に感謝したい。甲子園ではエースらしい投球ができるよう、意識を磨きたい。

⑫ 松谷 隆誠（3年）
ベンチでは前向きな言葉で選手を励ました。アルペンで選手を励ますことが多いので、投手を最高の形でマウンドに送り出したい。

② 秋山 龍正（3年）
思い切ってプレーした結果が勝利につながり、うれしい。甲子園では省エネでも、捕手としても役割を果たしたい。

⑬ 近藤 遼一（2年）
青森大会では活躍できず、悔しい思いもした。持ち味のフルスイングを全面に、甲子園では積極的に本塁打を狙っていきたい。

③ 但井 智哉（3年）
夢な決勝、準決勝と打撃で貢献できたことは良かったが、決勝で気負ったことが反省点。次は中軸に恥じないスイングをしたい。

⑭ 島袋 翔斗（2年）
粘り強く、守って打ち勝つ自分たちの理想の野球ができた。尊重の出塁にさらに磨きをかけて、勝利に貢献したい。

④ 近藤 俊太（3年）
守りから、リズムをつくる自分たちの野球を貫けることができた。甲子園でも、堅実なプレーでチームに貢献したい。

⑮ 豊田 勝利（3年）
ベンチを盛り上げる声出しが自分の役目だ。甲子園でも一戦一戦を目指し、チームのために大きな声で鼓舞していきたい。

⑤ 下山 昂大（2年）
決勝で本塁打を放ち、チームの勝利に貢献することができた。3年生二日でも長く試合ができるよう、さらに打撃を強化したい。

⑯ 伊藤 大将（2年）
優勝はうれしいが、試合に出場できなかった悔しさもある。甲子園で起用される機会があれば、役目を果たしたい。

⑥ 武岡 龍世（2年）
決勝は緊張感のある厳しい試合となったが、苦しい場面でいつも通りのプレーができたことが勝利につながった。

⑰ 北林 英治（3年）
絶対に甲子園に出場するという気持ちで今まで練習してきた。守備でチームに貢献し、全国制覇を成し遂げたい。

⑦ 東 健太郎（3年）
チームに勢いを付けるバッティングができた。光星の攻撃とピッチャーを引っ張り、甲子園では大暴れしたい。

⑱ 吉田 和永（3年）
全国の切符を手にする」ことができてうれしい。バッティングが自分の長所なので、甲子園でも打てるよう準備していきたい。

⑧ 長南 佳洋（3年）
ここぞという場面で打つことができ、力を入れてきた打撃練習の成果を発揮できた。甲子園には、より遠球感を磨いて臨みたい。

⑲ 山田 怜卓（2年）
最高の3年生たちと一緒に全国に行きたいと思ってやってきた。チームの役に立てるよう、やれることを今後、探していきたい。

⑨ 矢野 虎弥（3年）
打撃と守備の両面でチームに貢献することができた。甲子園では一つでも多く記憶に残るプレーで勝利を目指し、躍進を願いたい。

⑳ 太山 皓仁（2年）
今のままでは全国優勝は難しいかもしれないので、大会までにもっと練習を積み、一つ一つのプレーに磨きをかけたい。

⑩ 中村 優惟（3年）
他の投手陣と力を合わせながら、自分の役割を果たすことができた。甲子園では一球の失投も許されない。気を引き締めて臨める。

デーリー東北新聞社提供